

地域研究ワークショップ 「環境と生業をめぐる地域住民のとりくみ」

西 真如

2004年10月、「環境と生業をめぐる地域住民のとりくみ」と題するワークショップが、アジスアベバで実施された。この会合は、21世紀COEプログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」のもとで開催され、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）と東南アジア地域研究センター（CSEAS）、それにアジスアベバ大学（AAU）の教員、大学院生らが参加した。3日間にわたった研究報告セッションでは、両大学の院生22名がそれぞれの研究成果を発表した。またセッションが終了した翌日から実施されたスタディツアーでは、発表者が調査をおこなったフィールドを実際に訪問し、現地で討論をおこなった。

21世紀COEプログラムのもとでは、フィールド調査にもとづいた地域研究を推進するため、13カ国に14カ所のフィールドステーションが設置されている。これらのフィールドステーションとおしの連携を推し進めるとともに、受入国の研究機関との協力関係を深めることが、今回のワークショップの狙いであった。なお研究発表の要旨およびスタディツアーの詳しい報告は、多数の写真とともに下記のウェブページで公開されているので、本稿と併せてごらん頂ければ幸いである。

<http://areainfo.asafas.kyoto-u.ac.jp/efs/>

準備

開催地のエチオピアでは、アジスアベバ大学社会科学部のゲブレ・インティツ博士が、ワークショップの開催許可や会場確保のため大学当局と交渉するとともに、同大学の院生から発表者を選定する作業を進めて下さった。他方、京都でも21世紀COEプログラム事務局を中心に、ASAFASとCSEASの教員、院生らが参加して、準備会合や打ち合わせを重ねた。

そして9月下旬から10月中旬にかけて、私を含め数名のASAFAS院生がアジスアベバに入り、ゲブレさんとの打ち合わせや、発表会場の準備、スタディツアーのアレンジにあたった。スタディツアーの手配を一手に引き受けてくれそうな旅行社が見あたらな

かったため、ホテルや航空券の予約は無理を聞いてくれそうな顔なじみの代理店に頼み、車の手配は多数のランドクルーザーを保有する別の店にお願いせねばならなかった。またAAUが用意してくれた発表会場には音響機材が付属していなかったため、会場係を引き受けた院生は、セッションが始まる前日までマイクやアンプの確保に奔走することになった。

研究報告セッション

10月21-23日の3日間に、次の5つのセッションがおこなわれた。

環境と資源の保全／管理

社会的相互関係、紛争および紛争解決

生存の戦略と困難：農村の文脈

生存の戦略と困難：都市の文脈

在来知識とその活用

これらセッションのタイトルだけを見てもわかるように、発表者の研究分野は多岐にわたる。そのうえ調査地の広がりも、アフリカ7カ国（エチオピア、ケニア、タンザニア、カメルーン、ガーナ、セネガル、ザンビア）とアジア3カ国（インドネシア、フィリピン、バングラディシュ）におよぶ。したがって今回のワークショップの狙いは、地域研究の課題について何らかのコンセンサスへと導くことよりは、その前提として、これからの地域研究を担おうとする大学院生たちが、お互いの研究について知り、その文脈を確かめあうことだった。

各セッションでは、研究発表に対して活発な議論がおこなわれた。ただ全体としてみれば、個々の発表内容についての評価よりも、互いの「研究作法」の違いに関心があつまる傾向もあった。というのも、アジスアベバ大学に所属する6名はいずれも、貧困あるいは紛争解決をテーマに選んでおり、これら現代的な問題についての最近の議論に参加することを重視しているように見受けられた。これに対してASAFASでは、個々の事象についての観察と、具体的なデータの積み重ねを中心とする調査の実践が、研究の基礎としてとりわけ重視される。

結果としてASAFASに所属する発表者の目には、「アジスアベバの流儀」はフィールドの状況から飛躍しがちな議論のように映ったし、その逆の視線は、「京都の流儀」による研究が、現代的な議論に参加していないのではないかと感じたようである。その背景には、アジスアベバ大学で人類学を学ぶ大学院生が3ヶ月間のフィールド調査をもとに修士論文を執筆するのに対して、ASAFASでは修士論文にあたる博士予備論文を執筆するために、まるまる1年をフィールドで過ごすことも稀ではない、という事情もあると思う。

したがって、このセッションに「今後の課題」があるとすれば、それは異なる大学組織に属し、異なる地域を研究する大学院生が、上に述べたような流儀の違いを踏まえながら、互いの研究内容を公正に評価しあうような、ピア・レビュー (peer review) へと発展させる可能性をさぐってゆく、ということだろうか。

ところで私はというと、2番目のセッションのなかで、グラゲのエスニシティ形成にかかわる発表をおこなった。グラゲはエチオピアの近代史において、商人集団として知られているが、アジスアベバ大学の教員や学生のなかにも、グラゲに帰属する人は少なくない。既に日本語で発表した論文（『アフリカ研究』第63号に掲載）にもとづいた発表であったが、フロアからの反応のなかには「あなたはグラゲの人びとの気持ちを理解したうえで発言しているのか」という趣旨の厳しいコメントもあり、アイデンティティの問題について、その当事者たちの目のまえで論じようとすることの難しさを実感させられた。

とはいっても、帰属について論じることの難しさは、私ひとりが感じているわけではないし、個人の研究の問題として抱え込んでしまうべきでもないと思う。アジスアベバ大学に目を向けると、民族連邦制のもとで大学制度が「連邦議会化」する状況、つまり組織そのものはエチオピアという国家に所属しながら、そこに集まる人びとは、それぞれが帰属する民族を代表して話し始めるような状況のなかで、社会について論じることが、ますます難しくなっているように見える。しかし、もし私たちが問題の切実さをきちんと共有できるならば、お互いに納得のいくような議論を成立させる道もあるのではないだろうか。

スタディツアー

今回のワークショップでは、エチオピア国内で調

査をおこなった発表者のなかから、4名がファシリテーターとして名のりをあげ、それぞれマゴ国立公園（南部州南オモ地方）、エンセーテと土器作りの村（同）、ゴンダールのアズマリ音楽（アムハラ州ゴンダール地方）、およびアルシの生業と社会（オロミヤ州アルシ地方）へのスタディツアーを企画した。

それぞれのツアーの報告は、既に紹介したウェブページに掲載されているので、ここでは私が参加した「エンセーテと土器作りの村」について、個人的な感想だけを記したい。このツアーは、アジスアベバから陸路で約800km離れた南オモ地方に暮らすアリの人びとの村を目指すもので、ぜんぶで5泊6日の行程であった。ファシリテーターを務めてくれたのはASAFASの金子守恵さんと鈴木郁乃さんで、同じくASAFASの重田眞義助教、伊谷樹一助教、村尾のみこさんが参加した。

重田さん、金子さんと鈴木さんはそれぞれ、南オモ地方の役所がおかれているジンカの町から30kmほど離れた、M村の周辺で調査をおこなっている。私たちが訪れたとき、村を流れる川のうえでは、立派な石造りの橋を架ける工事が進んでいた。道路が改修されたおかげで、昨年からはM村にもバスが通うようになったらしい。エチオピアでは近年、道路の整備が急速に進んでいるが、それは過去の政府によって「辺境」と見なされてきた地域にも及んでいる。アジスアベバに直結する幹線道路は、世銀やEU、日本政府などの援助で改修されているので、政府は地方道路の拡充に力を入れている。

私たちは、村の住民であるMさんのお宅に滞在させたもらった。彼は美しい混作畑を維持しており、お陰で私たちは、たいへん豊かな食卓にあずかった。しかしMさんは、道路の付け替えのせいで畑を削られたと嘆いていた。将来、子どもたちに分与することを考えれば、彼の畑はじゅうぶんに広いとは言えないのかも知れない。道路が開通したことで、換金作物（コーヒーや香辛料）の競争力が増し、世帯あたりの耕作面積の減少を、いくぶんは相殺するだろうか？しかし、2トントラックに乗ってやってくる商人たちは、いつも彼らの作物を安く買い叩こうとするに違いない。政府や援助機関の考えでは、道路網を整備し、国内市場の統合を促進すれば、エチオピアの貧困が緩和されるはずだ。Mさんのような農家が、これからも豊かな生活を維持してゆくために、村に開通した道路はどれほどの効用をもたらすのだろうか。

（にし まこと 京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科）